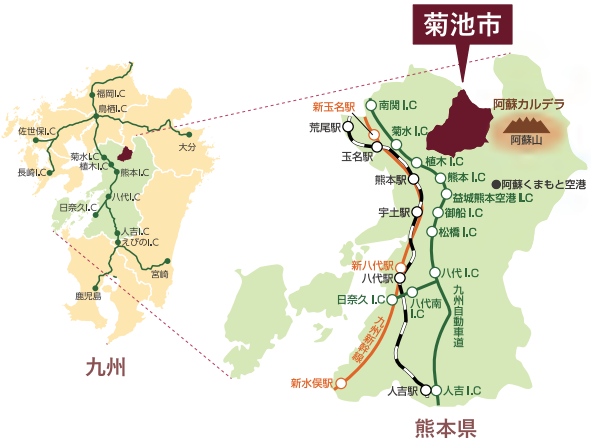
菊池一族ことはじめ

中世の動乱を駆け抜け、
九州を征した菊池一族。
その魅力をギュッと1冊に
つめこみました！



熊本県内の車での交通アクセス

○熊本I.C	国道57号線・国道325号線	約40分 →	菊池市
○菊水I.C	国道325号線	約40分 →	
○植木I.C	県道53号線	約20分 →	
○熊本駅	国道387号線	約60分 →	
○熊本空港	国道443号線・国道325号線	約30分 →	
○阿蘇市	国道57号線・国道325号線	約60分 →	

生誕700周年

菊池川流域

JAPAN HERITAGE
日本遺産

お問い合わせ先

菊池市役所 政策企画部 菊池一族プロモーション室
〒861-1392 熊本県菊池市隈府888　TEL.0968-25-7267

▼菊池一族ホームページ
https://www.city.kikuchi.lg.jp/ichizoku/

菊池一族

九州を征した一大豪族―

菊池一族

平安時代の後期から室町時代にかけての450年間、菊池を中心に肥後で活躍した武士の一族です。『源氏物語』、『蒙古襲来絵詞』、『太平記』など、名だたる書物に足跡を刻み、中央にまでその名を轟かせた九州の一大豪族でした。24代にわたって築き上げられた絢爛たる歴史の中から、ここでは一族の大きな転機を担った南北朝時代を中心に、5人の当主の物語を紹介します。

受け継がれる信念

菊池一族の大きな魅力は、その誠実さです。代々朝廷の忠臣として奮闘し、たとえ不利な立場になってもその信念を覆すことなく、一途に志を貫き通しました。

450年という長い時の中で、それぞれの時代をまっすぐに駆け抜けた父や祖父、さらに祖先に恥じぬようにという想いが、不器用にも見える生き方の中に垣間見えます。

最盛期の南北朝時代には、全国的な北朝有利の状況にあっても南朝の雄として最後まで戦い抜き、そのひたむきな姿勢は、後の世にまで語り継がれることになりました。

菊池武光

生誕700周年

令和元年、菊池一族の歴史のなかで最も輝きを放った15代武光の生誕700周年を迎えました。

百戦錬磨の勇将として名を馳せ、後醍醐天皇の皇子懐良親王を盛り立て九州を平定し菊池一族の最盛期を築いた、菊池が誇る一大英雄です。

【愛刀】達磨丸

イラスト　立花

キーワード　南北朝時代

鎌倉時代の末期、武士たちの心は幕府から離れ始めていました。

天皇中心の政治を目指した後醍醐天皇は、全国の武士に呼びかけて倒幕を果たし、天皇による新たな政治「建武の新政」を始めます。

しかし、これも武士には評判が悪く、倒幕の英雄足利尊氏が離反し、後醍醐天皇に対抗するために別の天皇を立てました(北朝)。京都を追われた後醍醐天皇は、奈良の吉野で朝廷を開きます(南朝)。

この後日本は56年間、動乱の世となるのです。

10代

菊池武房

きくち たけふさ

時は鎌倉時代の後期。南北朝の動乱前夜の日本に、元寇と呼ばれる大きな脅威が忍び寄っていました。中国を支配していた元による日本侵略戦争で、このときの様子を描いたものが竹崎季長による『蒙古襲来絵詞』です。この絵巻物には、10代武房の雄姿が収められています。

涼しうこそ見え候らへ

それまで一騎打ちが戦の流儀であった日本軍は、蒙古軍の集団戦法や新兵器に大いに翻弄されていました。そこに立ちふさがったのが、武房率いる菊池軍をはじめとした軍勢でした。絵詞によると、「武房は芦毛(灰色)の馬に乗り、紫の鎧を着て紅の母衣をかけた勇ましい武者で、百余騎を率い、敵の首を二つ、太刀と薙刀の先に貫き郎党に持たせていた」とされています。その姿に感嘆した竹崎季長は、「涼しうこそ見え候らへ」、現代風に言うと「凛々しいお姿ですね」と声をかけたと記載されています。

生の松原の菊池軍団

1281(弘安4)年、元軍は再び九州へと攻め寄せ、武房と季長は博多湾に面した生の松原にて再会しています。季長がここを通ったとき、武房は一族郎党とともに防塁の上を固めていました。ずらりと居並ぶ甲冑姿の一団は実に壮観で、いかに煌々しく見えていたのかを推し量ることができます。

「人々多しと言えども菊池の二郎武房、文永の合戦に名を上げし」とあるように、前回の戦の英雄として憧れの眼差しで武房を見ていたのでしょう。

恩賞問題とその後の菊池一族

武房の活躍もあって、何とか蒙古軍を撃退できたものの、侵略を防ぐための戦であったため土地も得られず、報酬はごく限られたものになりました。本来、報酬は戦功の高かった者から配分されますが、武房に与えられたのは甲冑一式とほんのわずかな領地のみで、とても活躍と犠牲に見合うものではありませんでした。

この出来事は、一族に幕府に対する不信感を抱かせる大きなきっかけをつくることになったのです。

通への一歩

虎の尻鞘

武房の尻鞘(鞘のカバー)には虎の毛皮が使われています。本来、菊池氏よりも官位が上の人に特別に所有が許されていたもので、武房の実質的な権勢を物語っています。

菊池武房

12代

菊池武時

きくち たけとき

鎌倉幕府に対する武士たちの不満を受け、天皇中心の世の復活を目論んでいた後醍醐天皇は倒幕を呼びかけました。これに応えて1333(元弘3)年、12代武時が九州における幕府の出先機関である「鎮西探題」(福岡市博多区)を襲撃しました。

博多合戦

多くの武士が鎌倉幕府に不満を抱いてはいたものの、依然として幕府の勢力は軽視できるものではありませんでした。

単独での襲撃は難しいと判断した武時は、九州でも有力な武家である少弐氏と大友氏に呼びかけて、鎮西探題の襲撃計画を練りました。

ところが少弐・大友は、全国的な倒幕の機運はまだ高まっていないと判断し、直前になって裏切ったのです。武時は援軍が望めないなか、菊池・阿蘇勢のみを率いて作戦を決行しました。

袖ヶ浦の別れ

決死の覚悟で探題館に突入した武時は、鎮西探題北条英時を追い詰めますが、寝返った少弐・大友軍に背後を突かれ、一時撤退を余儀なくされます。探題館近くの袖ヶ浦で態勢を立て直すと、再度突入する前に息子の武重(13代)、武光(15代)を呼び出しました。

圧倒的な兵力差のもと、必ず死ぬとわかっていて突入すると言う父、武時。一緒に行くと食い下がる武重を、「天下のために」と諭して菊池へと帰らせ、わずか70騎あまりを率いて探題館へ突入し、討死しました。

忠厚第一の者

武時の討死からわずか2ヶ月後、有力御家人足利高氏の離反をきっかけに、鎌倉幕府は滅亡。前回鎮西探題に味方した少弐・大友は、今度は天皇方として探題館を襲撃し、倒幕後はこぞって手柄を主張しました。この場面で、武時の行動を「忠厚第一」と高く評価し、後醍醐天皇に進言した人物がいます。天皇方随一の英雄、楠木正成です。

これを受けて、後醍醐天皇は武時の長男、13代武重を肥後守に任命します。武時の決死の突入は、こうして報われたのです。

通への一歩

菊池武時公騎馬像

武時は菊池神社の主祭神の一柱であり、菊池神社の境内には武時の騎馬像が建てられています。福岡市七隈の菊池神社にも祀られているほか、熊本市島崎にある三賢堂には、肥後三賢人の1人として座像が納められるなど、市外でも遺功を偲ぶことができます。

13代

菊池武重

きくち たけしげ

肥後守になった武重は、後醍醐天皇の側近として京都に残りました。後醍醐天皇からの報酬の多くは公家に偏っており、大多数の武家は新しい体制に不満を抱いていました。その結果、倒幕の立役者である足利尊氏が旗頭として持ち上げられ、後醍醐天皇との対立構造ができあがりました。

菊池千本槍

叛旗をひるがえした足利尊氏率いる武家方に対し、後醍醐天皇は討伐軍を差し向けました。このとき天皇方を率いる新田義貞とともに、武重も討伐に加わっています。

1335(建武2)年11月、両軍は箱根・竹ノ下で激突。殿として大将新田義貞を無事に撤退させるため、武重は自軍の3倍の敵を打ち破る画期的な戦法を発案しました。日本初の集団槍戦法「槍ぶすま」です。千人の兵で3千人の敵兵を倒したといわれ、「菊池千本槍」として後世まで語り継がれることになりました。

菊池家憲

日本史上唯一2つの王朝が並立した南北朝時代が始まります。動乱の世を生き残るため、武重は一族の結束をより強いものにしようと「家憲」を制定します。

「寄合衆内談の事」と題されたこの家憲は、天下の動静に関わるような大事については最終的に武重が決定権を持つが、通常時の内政については庶家など重臣の意見を尊重するという内容でした。

議会制民主主義に通じるこの精神は、後に五箇条のご誓文の参考にされた、ともいわれています。

聖護寺

武重は禅宗を深く信仰し、鳳儀山聖護寺を建てるための土地を寄進したことでも知られています。武重が菊池に招いた大智禅師は、二度も中国へ留学した経験を持つ高僧で、生涯を禅道に捧げた人物でした。

武重も出家して寂山という法名を名乗り、大智禅師の教えを請いました。「正道にそむくような行いをしない」という武重の信条は、禅宗を通じてより強固なものに成長したようです。一派をまとめあげるための指標としても用いられました。

武重の死と遺された一族

文武両面に秀でた武重でしたが、家憲を制定して間もなく、動乱がいよいよ激しくなりゆく中、34歳の若さで病没します。跡を継いだのは弱冠20歳の14代武士でした。十一男でありながら、正室の子という立場で当主に立った武士は、一族の統率に奮闘しながらも戦乱の中に苦戦を強いられ、ついに菊池本城(菊之城)を北朝方の合志幸隆の手に奪われてしまいます。

菊池一族に、大きなピンチが訪れていました。

通への一歩

刀工集団 延寿一族

戦いのさなか、とっさに周囲に生えていた竹を切らせて各々の短刀を結わえさせ、即席の槍を作って応戦した武重は、戦いの後、菊池に帰ると刀工集団延寿一族に数多くの槍を作らせました。延寿一族は名刀で有名な同田貫の祖先といわれています。菊池槍はその起源が短刀だったこともあり、まっすぐな細身の刃が特徴です。

現在は菊池神社の菊池神社歴史館に収蔵されています。

15代

菊池武光

きくち たけみつ

この局面で新たな軍勢を率いて登場し、6日間で城を取り戻した人物こそが、武重の弟、武光です。側室の子として当主の候補にも入っていませんでしたが、実力で当主の座を掴み取ります。百戦錬磨の勇将と恐れられ、菊池一族の最盛期を築いていきました。

懐良親王

九州には1つの転機が訪れていました。後醍醐天皇が征西将軍として派遣した皇子、懐良親王が九州入りを果たしたのです。

懐良親王は勝利後の領地を約束することで、九州の南朝勢をまとめ上げる使命を帯びており、武光はこれを迎え、菊池は九州南朝の中心地「征西府」となります。九州の南朝勢を納得させる大義名分が欲しかった武光と、強力な武力による後ろ盾が必要だった懐良親王。2人の利害は一致し、目的を果たすため、互いになくてはならない存在でした。

筑後川の戦いと九州の平定

日本三大合戦の1つに数えられる、1359(正平14)年の筑後川の戦い(大保原合戦)では、6万騎と伝えられる北朝軍に4万騎で挑んだといわれており、多くの犠牲を払いながらも大勝利を収めました。武光が太刀を洗った故事から名付けられた「大刀洗」や、懐良親王が陣を構えた跡に付けられた「宮の陣」など、現在も地名として残されています。

筑後川の戦いで勝利を収めた武光はさらに兵を進め、当時の九州の中心地である大宰府を占拠しました。翌年、九州の北朝勢をすべて降伏させると、征西府を大宰府に移し、九州南朝方の、そして菊池一族の最盛期を築き上げたのです。

都への船出

当時、南朝方で有利に展開していたのは、全国でも九州だけでした。吉野の朝廷はこの快挙を大いに喜び、征西府に都への大遠征を要請します。武光は大軍勢を率いて海路吉野を目指しますが、北朝勢の水軍の前に大敗。九州から中央へ駆け上る計画はあえなくついえ、征西府衰退のきっかけとなったのでした。

大宰府、陥落!

九州の情勢に注目していたのは、吉野だけではありませんでした。北朝方の室町幕府もこの状況は看過できず、将軍の懐刀とも呼べる、今川了俊を九州探題として派遣しました。了俊によって周到に練り上げられた包囲網の前に、ついに征西府は大宰府から高良山へ撤退を余儀なくされます。12年にわたる征西府の黄金時代に終止符が打たれたのです。武光はこの頃亡くなったとされていますが、死因や時期はわかっておりません。混乱を避けるため隠され、今でも謎のままなのです。

通への一歩

御松囃子御能[菊池の松囃子]

武光は親王が京を偲ぶ慰みとして、正月に能の上演を催します。帰郷は叶わないと覚悟したであろう親王が、その心遣いにどれほど慰められたか、想像に難くありません。武光が催した御松囃子御能は、『菊池の松囃子』として国の重要無形民俗文化財に指定されています。

17代

菊池武朝

きくち たけとも

武光の没後、16代武政もその翌年に戦没し、一族に遺されていたのは武光の孫、わずか12歳の賀々丸(後の武朝)でした。元服も迎えぬうちに南朝方の侍大将として立ち、側近に支えられながら、祖父と父を亡くした高良山を後に菊池へと撤退します。

戦乱の日々

菊池に引き上げた武朝は、宿敵今川了俊を相手に戦に明け暮れます。水島の戦い、託麻原の戦いなど勝利を重ねますが、戦局は好転せず、1381(弘和元)年、菊池本城は陥落し、征西府は南へと追われました。川尻から宇土、最終的に八代まで南下して抗戦を続けています。

菊池武朝申状

長引く戦況の不振に、南朝内部にも戦乱の終結を望む声が上がり始めます。南朝再興を目指し徹底抗戦の構えを崩さない武朝と良成親王は、次第に孤立していきました。

1384(元中元)年、武朝の失脚を目論む一派が、南朝朝廷に彼を貶めるような内容の訴えを起こし、朝廷は真偽を確かめるために使いを出して問いただします。これを受けて武朝は自ら筆を執り、一族が示してきた忠義の数々と、自らの潔白を主張しました。

この書状は「菊池武朝申状」と呼ばれ、後に菊池一族の略歴を示す貴重な史料として評価されました。南朝朝廷はこれを受け入れ、武朝と菊池家の名誉は守られました。

肥後守護 菊池武朝

その後、更に8年にわたって抗戦を続けますが、とうとう万策も尽き、征西府と吉野朝廷は北朝方の和睦案を受け入れ、南北朝は合一を果たしました。

出頭を命じられた武朝は、厳罰覚悟で了俊の下へ向かいます。ところが、用意されていたのは、幕府が認める肥後の領主である「肥後守護」の地位でした。

これは、敵方から見ても、肥後における菊池の功績を無視できなかったため、または菊池を味方につけたかったからなどの理由が考えられますが、確かなのは、南朝方で菊池が最も名誉ある待遇を受けたということです。

この時代、「家」を存続させるために、各地の武家はそれぞれの方法で生き残りを模索していました。有利と見える側を見極め、渡り歩く者。一族を分派させ、両陣営に仕える者。当時では当然の価値観でしたが、菊池一族が選んだのはそのいずれでもなく、信じたものへの忠節を貫き通すという生き方でした。

祖先たちが命を賭して掲げた未来への想いが、動乱の終わりにこうして実ったのではないでしょうか。

通への一歩

北宮阿蘇神社

菊池市北宮にある北宮阿蘇神社は武朝が建てたとも伝わっており、以後、菊池家の信仰のよりどころとなった神社です。懐良親王が使用したと伝えられる軍配が残っています。

良成親王

武光の死後、懐良親王は失意のうちに征西将軍職を甥である良成親王に譲ります。後征西将軍と呼ばれた良成親王は武朝と年齢も近く、親友のような間柄だったことが想像されます。その後彼らは17年間にわたり、青春時代の全てをかけて、動乱の世の中を戦い抜いていきます。

「菊池一族のまち」を歩こう！

隈府地区を中心に、現在の菊池にも菊池一族の足跡がたくさん遺されています。
史跡をたどって菊池一族の息吹を感じてみませんか。

将軍木（しょうぐんぼく）

御松囃子御能が開催される能場の正面には、樹齢６００年以上とされている椋の老木があります。『将軍木』と呼ばれるこの木は、懐良親王の御手植えとも、挿したてられた杖から芽吹いたともいわれており、大切に守られてきました。松囃子能が開催される10月13日は、この木を懐良親王自身に見立て、この木に向かって能や狂言を奉納しています。人間の観客は、あくまで二の次。観客席は将軍木の正面を避けるように組まれ、１年に１度の雅な舞で椋の木を主賓としてもてなします。

菊池松囃子能場（きくちまつばやしのうば）

松囃子能を奉納するために将軍木の前に作られた現存の能場は、江戸時代に建て替えられたものです。当時、倹約の気風の中、菊池の町人たちの直訴で通常より小さい大きさで建てることを条件に許可がおりました。

袈裟尾山北福寺

わいふー番館

「まちかど資料館」と「まちづくり寄合所」の２つの施設があります。

菊池神社

明治3年に菊池一族を称えて明治天皇の命により建築された、守山城の本丸跡にある神社。一族26人を配祀しています。

輪足山東福寺

菊池武重公墓所

九儀山大琳寺

熊耳山正観寺・菊池武光公墓所

15代武光が菊池五山の「五山の上」として1344年に建立。境内には武光の墓木とされる樹齢600年の樟の大木があります。

菊池武光公騎馬像

北宮阿蘇神社

無量山西福寺

手水山南福寺

手水山南福寺↓

キーワード　菊池五山

15代武光が鎌倉の五山にならって、1344年、熊耳山正観寺を建設。正観寺は「五山の上」として格付け、東福寺・南福寺・西福寺・北福寺・大琳寺の5つの寺が菊池五山として定められました。

菊池一族の歴史

平安	1070	初代則隆、深川に居を構える
鎌倉	1274	武房、元寇で博多に出陣する（文永の役）
鎌倉	1281	再度の蒙古襲来に一族で参戦する（弘安の役）
鎌倉	1333	武時、探題邸を襲撃し討死（袖が浦の別れ）
鎌倉	1335	武重、肥後守に任命される
鎌倉		武重、箱根竹ノ下の戦い（菊池千本槍）
鎌倉	1336	武敏、足利軍と多々良浜で戦うが敗れる
鎌倉		武吉、湊川の戦で楠正成らとともに自刃する
室町時代 南北朝時代	1338	武重「寄合衆内談の事」（菊池家憲）を定める
室町時代 南北朝時代	1341	武士、武重の死後、肥後守を継ぐ
室町時代 南北朝時代	1345	武光、合志幸隆から菊池城を奪還し家督継承
室町時代 南北朝時代		武光、正観寺を建て、菊池五山制を定める
室町時代 南北朝時代	1348	懐良親王、征西将軍として菊池に入る
室町時代 南北朝時代	1355	武光・懐良親王、九州北部を抑えて、大宰府を占領
室町時代 南北朝時代	1359	武光、懐良親王を奉じ、大保原（筑後川）合戦で勝利
室町時代 南北朝時代	1361	征西府が大宰府に移される（全盛時代）
室町時代 南北朝時代	1362	武光、長者原の戦いで大友・少弐軍を破る
室町時代 南北朝時代	1367	武政、肥後守となって、菊池本城（守山城）を築く
室町時代 南北朝時代	1368	懐良親王、武光らと東上計画（上洛）を決行し失敗
室町時代 南北朝時代	1372	今川軍に征西府占領され、武光ら高良山へ退く
室町時代 南北朝時代	1375	武朝、今川了俊軍を水島の戦いで破る
室町時代 南北朝時代		懐良親王、征西将軍の職を良成親王に譲る
室町時代 南北朝時代	1378	武朝、良成親王らとともに今川・大友軍を詫麻原で破る
室町時代 南北朝時代	1381	菊池本城、足利方の今川軍に攻められ落城する
室町時代 南北朝時代	1392	武朝、菊池に帰り、改めて肥後守護となる
室町時代 南北朝時代	1432	持朝、筑後守護職となる
室町時代 南北朝時代	1472	重朝、隈府に孔子堂を建てる
室町時代	1481	重朝、菊池で連歌一万句の会を催す
室町時代	1503	能運、城・隈部氏の助けをかりて宇土為光を破り、菊池に帰る
室町時代	1504	能運死去、菊池家正統絶え、政隆、跡を継ぐ
室町時代	1511	詫磨武包が菊池氏を継いで肥後守護となる
室町時代	1520	武包、大友氏に追われて菊池を去る

歴史解釈には諸説ありますが、この冊子は昭和57年発行の菊池市史をもとに作成しました。